

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0503 ◆◆◆

18/10/03

【 10月相場は「ドル高有利」、根強い続伸期待も 】

先日終了した9月相場は、月間の変動幅が3.32円となり、4-8月よりは大きな価格変動となったものの、それでも9月5日付の当レターで指摘した「よく動く9月相場」とまでは言えなかったようだ。やや期待外れに終わった感も否めない。

ただ、ドル/円は今週に入り114円台を一時回復するなど年初来高値を更新、さらなるドル高進行を期待する声も聞かれている。果たして、足もとの10月相場でドルはどこまで上昇することが出来るのだろうか!?

◎115円到達なら、日経報道「年間変動幅が過去最小」を解消

前記した9月5日付のレポートで、筆者は「今年一年を通して『歴史的な小変動で終わる(可能性がある)』—というイヤな考えが頭の中を少しずつチラつく状況下、今年の9月相場はいったいどんな値動きをたどるのだろうか!？」—と注意を喚起していた。

すると、筆者のレターに遅れること10日余り、17日付の日経新聞が「年初来のドル/円相場の変動幅は9円を下回る低水準。年間の変動幅が、1973年(為替が変動相場制に移った年)以降で最小となる可能性が徐々に意識され始めている」—と似たような論調を報じていた。

しかし、不思議なもので、日経新聞が逆の意味で呼び水になったのか、ドル/円は9月末にかけてドル高・円安が進行、年初来高値を更新する展開となっている。つまり、足もとの動きからすると、筆者や日経新聞の杞憂が解消される公算が高まってきた感も否めない。

なお、若干細かい話をすれば、筆者の論調は「年間の変動率」であるのに対し、日経新聞は「年間の変動幅」で正確には異なる物差した。「似たような論調」と指摘した理由もそこにある。

そして、日経新聞の論調からすれば、過去最小変動幅は2011年の「9.96円」になるが、筆者の論調では同年の年間変動率は12.3%で、もちろん平均(およそ17%)には遠く及ばないが歴史に残るほどの小動きでもない。実際、2006年の同9.26%、2015年は同8.35%、2017年の9.66%など、1年間で10%以下の変動ということは近年決して珍しくないようだ。

ともかく、年初来ここまでのドル/円相場において、小動きが続いていることに間違いはない。ただ、年内に115円到達なら、日経新聞が報じた「年間変動幅が過去最小」を解消することもあり、年末に向けたさらなる大きな相場変動を期待している。

さて、いささか前振りが長くなってしまったが、以下で肝心の足もと10月相場の見通しについてレポートしてみたい。

まず、1990年以降昨年まで過去28年間の戦績を見てみると、17勝11敗でややドル高有利となっている。そうしたなか、興味深いのは2011年から昨2017年まで7年連続で「ドル高・円安」に振れていることだろうか。ちなみに、2日付の日経新聞では、そんな10月ドル高有利の件について報じたうえで、理由について「日本勢による下半期外債投資」と「米企業による年末をにらんだりパトリエーション(運用資金の本国資金還流)」を挙げていたが、ともかく今年についてもドル高・円安の進展に注意が必要かもしれない。経験則を参考にすれば、月内の115円台突破といった可能性も否定出来ないだろう。

また、それとは別に10月相場には「まったく動かない」か「非常に激しい動きを示す」か、ふたつにひとつで両極端な値動きを示すことが少なくない、という別の特徴も見取れる。

うち「10月の大変動相場」の事例を取り上げると、大手ヘッジファンドLTCM破たん余波を受け、変動相場制以降で一日当たり最大級の下げ幅(1日約12円下落)を記録するなど、月間で25円以上も動いた1998年になるだろう。また2008年の10月も変動幅15.67円を記録し年間変動幅1位となるなど、ときたま狂ったような大相場・荒れ模様の変動をたどることもあることは、頭の片隅にでも留めておきたいところだ。

また、そんな荒れ易い為替市場に呼応するように、10月の株式市場も荒れる展開をたどることが多い。事

